

読売新聞 2018.7.28

生命記憶語る天性の筆

芥川喜好

ここに、本人がいる—

そう思わないではいられない論郭と実体をもつ、生きた「画集」の誕生です。

—昨年秋、六十七歳で逝ったスペイン在住の画家堀越千秋さんの追悼を、年末のこの欄に書きました。画壇という俗世間に一切交われず、独りの立場を貫いて多くのファンをもっていた「放浪派の巨匠」ゆえに、作品は散逸し、膨大な足跡を残したはずなのに全貌はつかみ難いものがありました。

他人は勝手なことを言う、評価なんて放っておけ — という構えの人でしたが、自分の作品や生きた軌跡への愛着はやはりあったのでしょう。亡くなる数年前から、旧知の編集者大原哲夫さん(70)に画集を作りたい希望を伝えていました。

だが手元には何もない。資金もない。大原さんは本人に長い自伝的文章を書いてもらい、末期がんとわかってからは急ぎ対話を重ねます。マドリードのアトリエを訪ねて、そこの空気を吸います。日ならずして画家は逝きました。

作品の行方は、生前確かめてあった本人の記憶をもとに人から人へと情報をたどり、思いがけぬ数が判明していきます。

雪深い上越の廃校跡の倉庫には、油彩の代表作が大量に保管されていました。東京芸大時代の授業で大きな影響を受けた解剖学者三木成未の遺宅からは、三木にあてた何十通もの手紙類が、きれいにファイルされた状態で見つかりました。個人宅の壁や戸に描きまくった絵、舞台画なども続々と。

放浪派の面目躍如です。

画集といえば、作品図版を並べて前後に評論や解説を配し、(画像:「たで」丹阿弥丹波子年譜) 作品目録をつけて一丁あがりというのが、日本式の定型です。編集者は黒子に徹します。大原さんの編集は独特のものでした。黒衣を脱いで顔をあらわし、編集の意図と経緯を自分の言葉で語り出します。

画家の歴史を制作と生活の両面からたどり、作品を凝視し、その時々を環境を明らかにし、その時代のがみやノートの数を読みこんで、一人の画家の成長と変貌のあとを追体験するように叙述していきます。

画家と編集者が四つに組んで押し引きする過程そのものが、六百ページ近い大冊になっていった。小学館の編集者時代に多くの美術書、音楽書を手がけ、モーツァルト、バッハ、武満徹の全集編者として知られる大原さんならではの相撲です。

堀越千秋は言っていました。

「表現とは、時と所を選ばずに出る体内発酵気体のようでもあろう」。こちらの胸を指して、「絵ってのはね、ここで描くもんです。世界はそこにある。俺はここにいる。そのぶつかった印が紙の上に出る」と。

既成の様式を楽々と踏み破る瞬発力を武器に、内なるエネルギーの伸びやかな開放に賭けた天才的な筆は、際立っていました。本紙でも、絵と文による連載や挿画の仕事で多くの読者を魅了しました。

ネット募金で三百人の賛同者を集め刊行にこぎつけた『堀越千秋画集—千秋千万』（大原哲夫編集室、一万八千円十税）は、その伸びやかさへの道筋を明らかにして興味が尽きません。

この人は、アカデミズムの画家となっても上々の道を歩んでいたはずで、東京芸大油画科の大学院を出てスペイン政府給費生となった初期の時代は、斬新な構想と、圧倒的な描写力を見せています。

しかし彼は芸大時代、三木成未の解剖学授業にのめりこんでいた。二か月前にこの欄で触れた『胎児の世界』（中公新書）の著者です。生命の形態発生と変遷を宇宙規模の時間経過のなかに跡づける、壮大な思想です。人間一個の存在の内に、三十数億年の生命の記憶とリズムが秘められている—そのことに気づいたのです。彼が描いた人間裸像には、人体の構造、ひいては生命の成り立ちへの強い意識が感じられます。

そうした世界がやがてはじけていく。生に合ったというスペイン風土の良き野放図さ、緩さもあったでしょう。ニューヨークへ出かけて触れた新傾向の絵画体験も、風通しのよさをもたらしたでしょう。「それまで抑制していたものが、バーンと勝手に出てきた」「チマチマやっていたのが、バサバサやるべえとなった」とは本人の言葉です。

たしかに作風は変わっていった。しかし、油彩、版画、ドローイングなどと膨大な作品に目を通した大原さんは「堀越の世界には、通奏低音のように三木成未の思想が流れていることが分かった」と言います。「彼の絵は三木の思想を絵にしたものと言ってもいい」とも。

これは面白い。画家死し棺を蓋いてのち、かつてない絵画世界の真意があらわれてくる気配です。来週開かれるささやかな出版記念展（東京・神田神保町、檜画廊）で、画集は初披露されます。

このコラムの二〇二二年十月から一七年十二月までの掲載分を収めた『時の余白に続』が刊行
されました。全七十二編。

みすず書房刊、二千八百円+税。